知らざるなきのである、(列子天瑞篇)己に之を生じ、之を畜へ、之を爲し、之を長ずといつてあるのを見れば、是れは明かに差別の境にあるものといはなければならない。而して彼が又直ちに之れに接して有たずといひ、恃まずといひ、宰せずといつたのは、即ち無差別の境にあることを示したのである。だから又之を以て玄德とも稱し得るのである。して見れば老子の眞旨は全然差別界を擺脫して、單純に無差別界に安住せんとする枯死禪的のものではなく、差別界にありながら、又能く無差別界を觀せんとするものであることは容易に知らるゝのである。莊子も矢張り屢、此意味を述べて居る。

不忘其所始不求其所終受而喜之忘而復之是之謂不以心捐道不以人助天是之謂眞人（大宗師）

己に受けて之を樂しみ、忘して之を復へすといつて居るのを見れば、彼は差別界を以て何處迄も嫌惡すべきものとなし、山林に隱遁せんとするやうな管見者流と同日に論ずべきものでないことは明らかである。莊子は尙ほ一層明丁に之を大宗師の篇末に述べて、次の問答を記して居る。

顏回曰回益矣仲尼曰何謂也曰回忘仁義矣曰可矣猶未也它日復見曰回益矣曰何謂也曰回忘禮樂矣曰可矣猶未也它日復見曰回益矣曰何謂也曰回坐忘矣仲尼蹙然曰何謂坐忘顏回曰墮枝體黜聰明離形去知同於大通此謂坐忘仲尼曰同則無好也化則無常也而果其賢乎丘也請從而後也

此坐忘の二字は吾々の深く味はなければならない文字である。而して已に坐忘といふは其の現世を嫌忌し之と絶縁せんとするものではなく、肢體は紅塵の裡に交はりながら、心は秋毫之に染まないやうでなければならない、即ち差別裡の無差別を觀し得るものでなければ、到底此に至ることは出來ないのである。莊子が孔子の言に寓して之を嘆美して居るのは、即ち彼も亦之を以て至れりと考へて居つたのであることは勿論論するを俟たぬ、佛敎家殊に禪家の老莊を貴ふ所以も亦全く此にあるのである。達摩の安心門に問ふ世間の人は種々に學問す、云何んか道を得ざる、答ふ、己を見るに由るが故に、道を得ず、己とは我なり、至人は苦に逢ふも憂へず、樂に遇ふも喜ばず、己を見ざるに由るが故に、苦樂を知らざる所以のものは、己を亡するに由るが故に、虛無に至ることを得ば、己自尙ほ亡ふ、更らに何物かあつて亡せざ

らん」といひ、又「智者は物に任して己に任せず、即ち取捨違順なし」等ともいひ、其の他所謂大乘佛教の經論中には至る所此旨意が述べられてあるのである。

以上論じ來つた所によつて之を見れば、老莊哲學の極致は實に高遠幽妙なるものであつて、哲學の極致は必らず此に至らなければならないのである。而して古今東西の哲學の中、何人か更らに一歩を之に進めたものがあつたであらうか、恐らくは否と答へなければなるまい。して見ると老莊の哲學は古今東西に於ける哲學の極致に達し得たものといつても差支ないやうに思はれる。

三

然しながら又更らに他の方面からして老莊の學說を觀察すれば、彼等は尙ほ未だ醇熟の境に至つたものとは思へない、又其の思想もまだ渾然として統一融合して居ない點のあることを發見するのである。のみならず彼等が宛も哲學の極致に達し得たやうに思はるゝ所も、措い哉人をして思想の偶、此に觸れたのではなからうかといふ疑念を懷かしむるのである。一體思想が醇熟し來つたならば、決して之と撞着した言行のあるべき筈のものではないのである。だから若し彼等の思想を

して、果して能く醇熟の境に入り、一切認識の統一調和を見、又彼等が其の極致に於て能く安心の地位を得たものであるとすれば、假令ひ理論上に於てはまだ周到なることを得ないとしても、即ち哲學の組織としてはまだ足りない所があるとしても、啻に古代に於ける大作家たるのみではなく、古今を通じての大作家たるに耻ぢないのであり、啻に東洋に於ける大思索家たるのみではなく、世界に於ける大思索家なるを失はないのであつたが、事此に出でないのは、千載の下、徒らに人をして痛嘆に堪えざらしむる次第である。

然れば何等の點を以て彼等が思想の未だ醇熟しない證據となすべきであらうか。余輩の見る所を以てすれば其の不醇熟の點は二三にして足らないのである。先づ彼等の說が哲學の一組織として、完美周到なるを得ないことは今必らずしも論じない。此の如き事を以て彼等を咎むるは、寧乃過酷といはなければならぬ。彼等は又皆自然を尙び、自然を以て至善至美のものとなして居るのであるが、併し老子が道之を生じ、德之を畜へ、物之を形くり、勢之を成す、是を以て萬物は道を尊ひ德を貴ばざるなし、道の尊き德の貴き、夫れ之を命ずるなくして常に自然たり」（五十一）といい

ひ、列子が「生者は理必らず終るものなり、終るものは終らざるを得ず、亦生ずるものの生せざるを得ざるが如し」(天瑞篇)といつたのを以て之を觀れば、無差別界が管に自然であるのみでなく、差別界も亦是れ自然たるを失はない筈ではなからうか、彼等自然を以て至善至美であるとするならば、差別界其の儘か又至善至美のものでなければならない、若し果してそうであるとすれば彼等が嬰兒に復歸し、無差別界に至らんと欲するのは、全く謂れないことゝいはねばならぬ、假令ひ差別界が惡なり、醜なるものであるとしても、若し必然の勢を以て此に至らなければならぬものとすれば、嬰兒に復歸し、無差別界に至らんと勉むるのは、反つて不自然であつて、到底不可能の事ではなからうか、又彼等は所謂無なるものからして萬化の發生を說くに際し、彼等の所謂個體元理なるものは、果して哲學上確實なるものとして承認すべきであらうか、何故其の然らざるを得ざるかに就いては尙ほ多少の解釋を要するのである、更らに又實際上に於ても「聖を絕ち、智を棄て、仁を絕し義を棄て、巧を絕し利を棄つ」るとか(老子十九章)或は學を絕するとか(同二十章)いふことは果して事實出來得べきことであらうか、何人も之を否定するに相違ない、而して此の如き

事は反つて單純なる無差別の深坑に陷ぬつたものではなからうか、此等の理論的並びに實際的の欠點撞着は今余輩の必らずしも說くことを要しない所である。余輩は此に唯彼等の思想の傾向並びに其の言論の明かに徵すべきもの〻數例を、掲げて、余輩の言の妄ならざる所以を證明して置かうと思ふのである。

一　若し道家者流にして眞正に絕對と冥合し、萬物の我と一體たることを知つたとすれば、又何んぞ彼此の別を立つることのあるべきであらう、已に彼此の別がなければ又秋毫己を利する念の其の胸中に萌すといふやうなこともない筈である、洒々落々として須らく列子の所謂我の是非利害かを知らず、又彼の是非利害かを知らずといふやうにならなければならない。而るに今老子一篇を通觀する時は、其の中利己的感情の顯はれ出た所は實に少からぬ事である、のみならず吾々は實に彼が思想の根底に於て大利益を求むる念の伏在することを認むるに難しとしないのである。それ故に彼は

聖人終不爲大、故能成其大　(三十四章)

といひ、又

曲則全、枉則直、窪則盈、弊則新、少則得、多則惑、是以聖人抱一、爲天下式、不自見故明、不自是故彰、不自伐故有功、不自矜故長　（三十二章）

といつて居る是を以て之を見れば、皆其の自から爲すことのない所以のものは之を爲すよりも更らに大なる結果を得んが爲めであるといふ意味を明かに示して居るものといはなければならない。而して此意は尙ほ次に引用する言に於て愈著しく發揮されて居る、

天長地久、天地所以能長且久者、以其不自生、故能長生、是以聖人後其身而身先、外其身而身存、非以其無私邪、故能成其私　（七章）

功成而不居、夫唯不居、是以不去　（二章）

夫物芸々各復歸其根、歸根曰靜、是謂復命、復命曰常、知常曰明、不知常妄作、凶、知常容、容乃公、公乃王、王乃天、天乃道、道乃久、沒身不殆　（十六章）

名與身孰親、身與貨孰多、得與亡孰病、甚愛必大費、多藏必厚亡、知足不辱、知止不殆、可以長久　（四十四章）

是れに由りて之を觀れば老子が其私を爲し其利を欲することは彰々として蔽

ふべからざるのである、彼は名利を視ること宛も弊履の如くであるが、併し彼の棄てんと欲した所は、唯目前の小利である、彼が其小利を棄てんと欲した所以のものは、反つて之によつて一層大なる利益を得んが爲めである、其己を後にするやうに見ゆるのも畢竟は之によつて大に其私を營まんことを欲したからである。絕對は一切の差別を絕したものである、利害は元より此に存在しない、彼此の別亦元より此にないのである、我々の絕對に歸することを欲する所以は、唯善なく惡なく、利なく害なき境界に至らんことを求むるからである、其之に由つて私を爲すなと、いふことは固よりあるべきでない、利己の念は秋毫も其胸中に存することはないのである、然るに老子の言ふ所は何處迄も陽を柔とし陰に强を欲する意に外ならぬ、我々は到底之を以て絕絕の境に入つたものと考はへられないのである。

老子が利己的の欲念を以て其學の根底として居るといふことは古人も既に往々にして之を看破したのである、例之へば朱子の語類には（老子之術、須自家占得十分隱便方肯做、方有一毫於己不便、便不肯做（語類卷百二十五、一丁）とあり、薛敬軒も亦老莊雖翻騰道理、愚弄一世、奇詭萬變不可摸擬、卒歸於自私、與釋氏同（讀書讀卷一、十丁）

といつて居り、是れは皆明かに老子の利己心を有して居つたことを認むるものである、果して是れが釋氏と同しいか否は今論ずる限りではない、但莊子も亦旨を說くといふのは果して如何であらうか、莊子には未だ此の如く公書した所はないやうに思はれる。唯老子の學に至つては、秋毫蔽ふべからざる事實であつて、而して是れが抑も余輩の老子の學に疑ふ所以の一である。

二　莊子は今いつたやうに老子の如く明かに利己的の欲念を公言して居ないが、其無用の用といふことを說くに至つては、老子と少しも異なる所はない。彼等は共に無用を尙んだこと事實である、而して彼等は何の爲めに無用を貴んだかと問へば、彼等は共に無用にして始めて大用あることを得るからと答へるのである、然らば彼等か思想の根底は利益といふのは必らしも利己といふことではないけれども彼等は之によつて人を利し、天下國家を利せんとするのではない、何故かといふに彼等は已に天下を外にし、(大宗師)利害の端に屑しとせず、(齊物論)聖を絕ち、智を棄て、仁を絕ち義を棄てた(老子十八、十九)ものであるから、人を利するとか、天下國家を利するとかいふことは、秋毫其念頭にないのである、之を以て己を利するとせん

か、絕對無差別の境には彼此の別、利害の念はない筈である、已に彼此なく利害なしとせば、己を利するといふことは尙ほ更らない、況んや又巧を絕し利を棄つる(老子十九)に於てをやである。若し彼此をして差別界に於ける絕對を得たものとせば、彼等は又彼此を知り、利害を認むるであらうが、之を以て念となすやうなことはあるべきでない、若し之を以て念となすならば、彼は已に差別に墮したもので絕絕を體認したものではない。だから莊子は明かに利己の欲を言つては居ないが、其思想は未だ醇熟の境に達して居つたとは考へられぬやうである。老子には

上德不德是以有德、下德不失德是以無德(三十八)

ともあり、尙ほ明かに之を述べては

三十輻共一轂當其無有車之用、埏埴以爲器當其無有器之用、鑿戶牖以爲室當其無有室之用、故有之以爲利、無之以爲用(十一)

と言つてある、莊子にも亦此意を述べた所は二三にして足らぬのであるが、今此に其一二の例を擧げて置かう、逍遙游の末段には

今子有大樹患其無用何不樹之於無何有之鄉廣漠之野彷徨乎無爲其側逍遙乎寢

臥其下、不天斤斧、物無害者、無所可用、安所困苦哉

といつて、惠子が莊子に謂つて子の言は大いばかりで用なく、衆の同じく去る所であると樹に喩へて之を詰つたに答へたのである。其意は即ち大を用いるに自からの其法がある、若し之を以て之を用いたならば、實に無用の大用を爲すといふことを言つたものである。尙ほ人間生に於て莊子は反覆此旨意を述へて居る。匠不齊に之つて大木を見たが、其大さといつたら牛も其陰に隱くれる位、周圍は百抱もあり、高さは山に望むこと十仞、計りに枝があつて、其枝で舟が出來るやうなものは旁に十幾つとある、驚き見るものは市のやうに周圍に集つて居るが匠石は顧みもしない、弟子共は觀厭きる程見て居つてが、走つて匠石に追ひ付き、いふには、私が斧斤を執つて夫子に弟子入してからは、未だ嘗て此の如き美しい材を見たことはない、而るに先生は見返りもしないでサッサト行かれるのは何故であらうかと問ふた其時先生アレハ散木だ

夫柤梨橘柚果蓏之屬、實熟則剝則辱、大枝折小枝泄、此以其能苦其生者也、故不終其天年而中道夭、自掊擊於世俗者也、物莫不若是、且予求無所可用久矣、幾死乃今得之爲予大用

といひ次節又之を木に喩へて

此果不材之木也、以至於如此其大也、嗟乎神人以此不材

といひ神人の不材を用いて大用を爲すことを明かにし、次節又木の材なるものは皆其天年を終ることか出來ずして、斧斤の爲めに中途に夭せしめらるゝことをいひ、[此才之患也]となし、次節又牛の白顙なるもの、豚の亢鼻なるもの、人の瘙病あるものとは、巫祝皆以て不祥となし、河に適つてはならないものだとして居るが、[此乃神人之所以爲大祥也]と斷し、末節には又

山木自寇也、膏火自煎也、桂可食故伐之、漆可用故割之、人皆知有用之用、而莫知無用之用也

といつてある。莊子が反覆重說無用の用を辯ずることは至れり盡くせりといはなければならぬ。彼等か無用の用をいふのは即ち無爲の爲を貴ぶと同一筆法である。だから程子も亦老子同無爲、又曰無爲而無不爲、當有爲而以無爲爲之、是乃有爲爲也（二程全書卷五、一丁）といつて居る。程子の言は良に能く其肯綮に中つて居るのであ

る、而して是れは亦移して以て無用の用を論ずることが出來る。是れ余輩か老子の學に於てのみではなく、莊子に於ても兼ねて之を疑ふ所以である。

三　老莊の哲學には厭世的の傾向が傳はつて居る。一體無差別界に入つたものは好惡の念を生ずることはない筈である、好惡己にないのであるから之くとして自適し、所謂生を說ばず死を憂へざるものでなければならない、厭世的の思想などを抱く筈はないのである。世を厭ふ所以は其苦痛を感ずるからである、彼は自から其處に安んずることか出來ないからである、此の如きは決して絶對の境に入つたものとはいはれない。老子が少私寡欲(二十)といひ、聖人去甚去奢去泰(二十九)といひ、知足不辱知止不殆可以長久(四十四)といひ、禍莫大于不知足、咎莫大于欲得(四十六)といひ、欲を節し情を抑へ、聲色を遠けんとするのは己にやゝ厭世的退隱的の傾向を顯はし出したものとも見ることが出來る。朱子が老子の中には仙意あり(朱子語類二十五、三丁)といつたのは、何等の點を指したのか明かではないが、思ふに恐らくは此等の處を看破したのではなからうか。而して老子が更らに

吾所以有大患者、爲吾有身、及吾無身吾有何患(十三章)

といふに至つては厭世的の思想の成熟して居るものと見なければならない、彼は所謂小乘仙教者のやうに、此肉身の消滅を以て樂みとなしたものではなからうか。若し然うであるとすれば、彼は實に現世の苦痛に堪へることが出來なかつたのである、是れは迚も絶對を體認したものゝ口にする所ではない。莊子にも亦大に此傾向があり、莊子の外篇は必らずしも悉く莊子の說として信を措くことは出來ないのであるが、併し莊子內篇の意義を布演したものとすれば、吾人の參考に供するだけには十分の價値はある。秋水篇には莊子の事を記して次の如くにいつてある。

莊子釣於濮水、楚王使大夫二人往先焉曰、願以意內累矣、莊子持竿不顧曰、吾聞楚有神龜、死已三千歲矣、王巾笥而藏之於廟堂之上、此龜者寧其死爲留骨而貴乎寧其生而曳尾於塗中乎二大夫曰、寧生而曳尾於塗中、莊子曰往矣、吾將曳尾於塗中

若し果して是れが事實でないとしても、少とくも眞に莊子の意中を推度したものとすれば、彼は現世の累苦に堪へずして世を厭ひ、世を遁れ、唯以て自から樂しみ、自から潔せんとする隱遁者流と秋毫擇ふ所ないのである。而して余輩は莊子の意の誠に此にあつたと想像するものである、何故かといへば彼は大宗師に於て前

後再たび

夫大塊載我以形勞我以生佚我以老惠我以死

といひ、至樂篇には更らに其意を承り

人之生也與憂俱生壽者惛々久憂不死何之苦哉其爲形也亦遠矣

といつてゐるのである。是れは確に人生を以つて苦となし死を以て樂みとなしたものである。此點からして之を觀れば、莊子は實に厭世の深坑に陷ゐつたものではなからうか、至樂篇には更らに莊子と髑髏との問答に假りて次のやうにいつてある。

髑髏曰死無君於上無臣於下亦無四時之事從然以天地爲春秋雖南面王樂不能過也莊子不信曰吾使司命復生子形爲子骨肉肌膚反與父母妻子閭里知識子欲之乎

髑髏深矐蹙額曰吾安能棄南面王樂而復爲人間之勞乎

して見れば莊子の意の彼にあつたことは疑ないことであるが、無差別中の差別を觀したものは果して此の如く現世を厭ひ、死を以て至樂となすことのあるべきであらうか。彼は斷じて無差別を體認したものではないのである、羅什が老莊を破し

て六義を述べて居るが、其中に、未だ萬有に即して太虛となさず」といひ未だ無爲に即して萬有に遊ばず」といひ、又「得失の門を存す」(三論玄義卷一、九丁)といつたのは、亦此等の點を指して居るのであらうと思ふ。

列子も亦矢張り人世を遁れんことを欲し死を以て憂苦を免れ、快樂を得る所以となした

林類年且百歲、衽裂裘拾遺穗於故畦並歌並進、子貢曰先生少不勤行長不競時、老無妻子死期將至、亦有何樂、而拾穗行歌乎、林類笑曰吾所以爲樂、人皆有之、而反以爲憂、少不勤行長不競時、故能壽若此、老無妻子、死期將至故樂若此

而して其樂しむ所以を問はゞ

死之與生一往一反、故死於是者安知不生於彼、故吾知其不若矣吾又安知營々而求生非惑乎、亦又安知吾今之死不愈昔之生乎

といふのである。又子貢と孔子との問答に假りて

子貢曰大哉死乎、君子息焉、小人伏焉、仲尼曰賜汝知之矣、人皆知生之樂未知生之苦知老之憊未知老之佚知死之惡未知生之息也(天瑞篇)

といつて居る。彼は現世を以て憂苦となし、來世を以て快樂とし、快樂を逐ふて憂苦を避けんと勉めて居るので、彼の胸中には常に快樂と苦痛との念を以て充され、少しも之を脱することは出來ず、日夜之が爲めに勞して居る、此點に於て彼等は常人と更らに異なる所はないのである。一方に快樂があれば他方には是非之に對し苦痛かなければならぬ、已に現世の苦を憂ふとすれば、來世の快を樂しむも必らずしも無理ならぬことである。だから莊子も亦屢、死を以て樂となし、尸に臨んで歌つて居たのである。養生主の末節には、死の哀むべからざることを說き、大宗師には桑戸の尸に臨み、琴を皷らして相和して歌つて居たことを述べ、外篇至樂篇には又其旨を承け、莊子が妻の死に當り、箕踞盆を皷らして歌つたといふこともある。是れは一見脫俗のやうであつて、實は心中決して快樂苦痛を忘るゝことの出來ないことを證明するものではなからうか。張瑋の千百年眼にも亦之を論じて、莊周妻亡、皷盆而歌、世以爲達此殆不然、未能忘情、故歌以遣之耳、若能忘、又何必歌(卷三、五丁)といつてある。彼は果して憂苦に堪え難く、爲めに僅かに歌ふて之を遣れたのであるか、或は生を去つて死に之くを喜んで、爲めに之を歌ふたのであるかは、容易に決することの

出來ないことである。が、兎に角まだ此差別界を脫することの出來ないのは同しである。憂君憲も亦斯ういつて居る、婦人好幹家做功名、婦人之情也、莊周一生曠達欲效曳尾之龜、必是被妻子逼拶、不過到此方得脫然不覺手舞足蹈、逍遙游之作或者皷盆之後乎(同上)是れも一應道理のないことではないが、併し逍遙游の尙ほまだ脫然たることの出來ないといふ事實は前既に述べた所であるだから此だけでにて其前後を決することは迚も出來ないのである。之を要するに老列莊の三子は亦皆此點に於て、其思想の完全なる調和を得たものではないのである。

四　老子は既に情を脫することの出來なかつたものであるから、從つて彼の天下に爲すあらんと欲したのは亦其當然の結果であるといはなければならぬ。だから老子は次のやうにいつて居る。

兵者不祥之器、非君子之器、不得已而用之、恬淡爲上、勝而不美、而美之者、是樂殺人、夫樂殺人者則不可以得志于天下矣(三十一章)

又三十七章には

道常無爲而無不爲、侯王若能守、萬物將自化、化而能作、吾將鎭之以無名之樸、無名之

樸、亦將不欲、不欲以靜、天下將自定、

といつてある、彼は恬淡を以て上となし、無名の樸を守らんと欲した所以のものは亦唯之によつて以て天下を服し、志を天下に得んと欲したからである。乃ち彼は天下に爲す所あるを欲したことは明かで彼の志の俗界に齷齪たる亦之を知るに難しとしないのである。彼は後章尙ほ明かに此意を述べて

爲學日益、爲道日損、損之又損之、以至于無爲、無爲而無不爲、取天下常以無事、及有事、不足以取天下(四十八章)

といひ、其他六十章には國家を治むる所以の法をも說いてある。彼嬰兒に復歸するもの尙ほ何を苦んで天下に爲すあるを以て念となすべきであらうか、天下に爲すあるは固より可なるが、爲すあるを以て念となすに至つては許るすべからざるのである。

朱子は亦能く此間の消息を窺ひ得たのである、彼はいふ、今觀老子書、自有許多說話、人如何不要其學也要出來治天下(朱子語類百二十五、二丁)と、又(老子猶要做事在(同四丁)とかいつて居る、而して是れは實に老學の眞を穿つたものといはなければな

らぬ。が、併し朱子は又(莊子都不要做了、又却說道他會做、只是不肯做(同上)ともいつてある、實に列莊は未だ曾て此の如き意旨を顯はしては居ない。けれども彼等は共に道を論ずるに忙はしくして、天下を以て爲すことはなかつた。だから其の言論も自から之と相關せなかつたゞけの事である。が、在省篇に於ては、又無爲天に從ひ、其の性命の情を安んせば、天下此に治まるといふことを說き、肱篋篇亦至德の世、無爲にして、天下大に治まることを論して居る。思ふに彼等の根本思想は亦實に天下にあつたのではなからうか。彼等は天下の紛亂して治まらないことを見、之に激し、荒唐の言に寓して其意を顯はし出したのである。だから彼等の言は、一見世と相關せないやうに見ゆるが、其實は一面不平の極、世勢に激して發したものである、若し果してそうであるとすれば、天下の事は實に彼等か根本思想であつて、其の荒唐の言は即ち天下を以て事とする一念の顯はれ出てたるものに外ならぬと見ることも出來るのである。だから朱子の言は未だ深く彼等の思想の根底を發露したものといふことの出來ないやうに思はれる。

五　彼等が時世に激して居つたといふことは老子に於て最も明かに之を認め

得るのである。老子の第十八章から第二十章に至る迄の間の文字を取つて仔細に之を考へて見れば、如上の事實は容易に之を發見することを得るのである。

大道廢有仁義智慧出有大僞六親不和有孝慈國家昏亂有忠信(十八章)

絶聖棄智民利百倍絶仁棄義民復孝慈絶巧棄利盜賊無有(十九章)

第二十章に至つては又最も明丁に言ひ顯はされて居る。

絶學無憂唯之與阿相去幾何善之與惡相去何若人之所畏不可不畏荒兮其未央哉衆人熙々如享大牢如春登台我獨泊兮其未兆如嬰兒之未孩乘々兮若無所歸衆人皆有餘而我獨若遺我愚人之心也哉沌々兮俗人昭々我獨若昏俗人察々我獨悶々忽兮若海漂兮若無所止衆人皆有以而我獨頑且鄙我獨異于人而貴求食於母

陸子も亦こういつて居る(老氏見周衰名勝故專攻此處而申其說(象山全集三十五、四十九丁)。是れは明かに老子の時世に激して起つたことを言つたのである。已に時世に激して起つたものであるから、之れを矯めて太古純樸の狀に復歸せんとしたのであることは疑を容れないのである。朱子が莊子老子不是矯時(語類百二十五、五丁)といつて居るのは、未た當れりといふことは出來ない。而して及世之衰亂方外之士

厭一世之紛絮畏一身之禍害耽空寂以求全身於亂世而已、及老子唱其端而列禦寇莊周楊朱之徒和之(同八丁)といつたのも全然眞とは思はれぬ。若し彼等をして單に一身の禍害を畏れたものとすれば、天下の事に就いて彼れ是れいふ筈はない。天下の事を云々する所以のものは、明かに是れ時世を挽回し古の狀態に歸復せしめんと欲したからである。而して時世に激して起つたものとすれば、彼の心中一時も天下を忘るゝことの出來なかつたのも當然の事として解釋することが出來るのである。列子莊子は元來老子を承けて起つたものであるから、其の根本思想の亦自から此に存したのであらうと思ふ。

六　老子の中には又權謀術數を弄するやうなことが屢顯はれて居るのである。是れも彼れが天下の事は一日も之を忘るゝことが出來なかつた一の證據とするに足るのである。若し彼をして果して無差別界に游ふものでありとすれば、權謀も術數も何等の用はない筈である。老子の權謀を說いて居ることは、至る所に見るを得るのであるが、卅三章七十二章の如きは稍明かに之を認めることが出來るが其の三十六章に於て

將欲歙之、必固張之、將欲弱之、必固强之、將欲廢之、必固興之、將欲奪之、必固與之、是謂微明、柔弱勝剛强、魚不可脫于淵、國之利器、不可以示人

といひ又其六十五章に於て

古之善爲道者、非以明民、將以愚之、民之難治、以其智多、以智治國、國之賊、不以智治國、國之福、

といつて居るに至つては其權謀の旨意明丁であつて、最早や蔽ふべからざることである。が、是等の事は世人の既に知つて居る所であるから、今更めて論ずるには及ばぬと思ふ。

七　終りに老列莊の三子は皆無用の用といふことを說いて居る。何が故に無用の用を唱ふるかといへば、彼等は唯之によつて其性命を全うするとか、或は長壽を保たんと欲するに外ならぬのである。是れが抑も彼等の養生の術を談ずる所以であつて、老子は嗇を以て長生久視の道となし(五十九章)列子は晏平仲と管夷吾との問答に藉つて其の養生の法を說いて居る、

晏平仲問養生於管夷吾、管夷吾曰肆之而已、勿壅勿閼、晏平仲曰其目奈何、夷吾曰恣

耳之所欲聽、恣目之所欲視、恣鼻之所欲向、恣口之所欲言、恣體之所欲安、恣意之所欲行、夫耳之所欲聞者音聲而不得聽、謂之閼聽、目所欲見者美色、而不得視、謂之閼明、鼻之所欲向者椒蘭、而不得嗅、謂之閼顙、口之所欲道者是非而不得言、謂之閼智、體之所欲安者美厚而不得從、謂之閼適、意之所欲爲者放逸而不得行、謂之閼性、凡此諸閼廢虐之主去瘞虐之主熙々然以俟死、一日一月一年十年吾所謂養、拘此瘞虐之主、錄而不舍、戚々然以至久生、百年千年萬年非吾所謂養、(楊朱篇)

列子が所謂養生の法といふのは老子の所謂長生ではない、唯其の快樂を恣にするのであるが、其性命を全うするといふことは兩者同一である。莊子は次のやうにいつて居る。

吾生也有涯而知也無涯、以有涯隨無涯、殆已、已而爲知者殆而已矣、爲善無近名、爲惡無近刑、緣督以爲經、可以保身、可以全生、可以養親、可以盡年、(養生主)

一體彼等が總べて性命を全うせんことを求むる所以のものは畢竟其自然主義からして基づき起つて居るのであるが、併し既に死生を一にし、生を喜ぶこともなく、死を視ること歸するが如くであれば、敢て長生を望むべき所以もない。彼等は又死

を迎へないといつて居るが彼等は一方に於ては死を以て樂となし、來世の反つて現生よりも快なるを、知らずと考へて居るものであつて見れば、長生を欲するといふことは寧ろ自家撞着ではなからうか。假令ひ又彼等の所謂養生をして列子のいつたやうに其性情を恣にするにありとしても、其性情を恣にする所以を追究するならば、畢竟形の爲めに拘束せられ、天年を夭折するからといふことに歸するか然らざれば一生の快樂を恣にすることが出來るからといふに終るのである。孰れにしても絶對を體認したもの丶口にすべき所でないのは明かである。萬物對なければ、快樂苦痛の差別もなければ、死や生もない筈である。之を要するに彼等が養生の法を說く所以のものは竟に余輩の解することの出來ない所である、而して偶、彼等の思想の未だ一貫する所のないことを表顯するに過ぎないといはなければならない。

以上論じた所によつて之を觀れば、老莊の思想は到底以て醇熟の境界に入つたといふことは出來ないのである。彼等は動もすれば曠達大悟の言を吐いては居るが吾人は此等の言を以て容易に彼等の眞面目となす譯には行かない、彼等の學は亦

哲學上至極の域に達したものではない。肇法師が美則美矣然期神冥累之方猶未盡也といつたのは亦良に最もの事といはなければならぬ

老子の學術は固より老子の自から發明した所ではなくして、其先進の論を襲ふたものであることは蔽ふべからざる事實である。彼等先進の士は果して如何なる境に達し得たものであるかは、今確かに之を知ることは出來ない。何故かといふに片言隻語は容易に其全班を評隲することを許さないものであるから。が併し余輩を以て之を見るに彼等の到達し得た所は、亦秋毫も老莊の上に出たものではなからう。何故かといふに、許由や巢父は古來所謂隱者なるもの丶泰斗とする所である、而して許由の瓢を掛け、巢父の耳を洗つたといふことは、古人の傳へて至清となす所である。が、余輩から之を見れば彼は尙ほ空に着し、物に拘束せられて居ることを免れぬのである。彼の自からを潔くせんとして居つたのは、即ち偶、物我の念去らずして快樂苦痛の感情が斷えず其胸裡に往來して居つたことを證するのである。だからして王維もいつた、耳非駐聲之地聲非染耳之跡、惡外者垢內病物者自戕、此尙不

能至于曠士、豈入道之門也(千百年眼卷一、三丁)是れは實に至論といはなければなるまい。其他嵇康の書いた聖賢高士傳によつて之を見るも、石戸の農は舜が天下を以て之を讓らんとした時に、妻を負ひ子を携へ海に入り、終身反らなかつたとあり。湯が天下を以て卞隨に讓らんとした時、卞隨は吾之を聞くに忍びずといつて、身を桐水に投じたと傳へ、又務光に讓らんとしたらば、廢上不義、殺民非仁、無道之世不踐其土、況於尊我哉といつて、石を抱いて廬水に沈んだといふことである。其外古の所謂高士といつて居るものは澤山あるが、每々此類である。是れは皆老莊の至れる所である。老莊は思ふに又此等の學を承けて起つたのであらう。道學の淵原は古から之を黃帝に置くのであるが、黃帝は何んな言行を爲して居つたか少しも明かでないのであるから、今は之を論じない。

又思ふに道家者流の學は皆當時紛亂の狀態を見、之に激して起つたものであるから、彼等は世と相關せざるのではなくして、實は此紛亂の世を救はんと欲したのであらう。但其之を救ふ所以の方法が鄒魯學派に於けるやうに紛亂の世の中に入り、其弊を除き之を改善せんと勉めたのではなく、根本的に之を顚覆し、更らに古の

狀態に復し、而して何處迄も此單純質朴の狀態を死守せんと欲したのである。彼が時勢に激し、其の弊を極言した理由は、此に於て見ることが出來る。彼等が有して居つた厭世的の傾向は、卽ち人間は生るゝよりも生れない方は遙かに好ましいといふやうなのではなくして、唯當時紛亂の世を厭ひ、之を遁れんと欲したに過ぎない。だから彼等は又嬰兒無能の狀態を以て至樂の境と考へたのである、若し一切の世界は悉く非であるといふのならば、又彼を以て至樂となす筈もない。彼等の死を樂んだのは亦唯現世を厭ふた極、當時のやうな世界に於ては寧ろ早死した方が增しだと思ふたからである。彼等が無用の用を唱へ、大快樂を欲した所以も此に至つて容易に之を解することが出來る。彼等は現世を脫し、大古純朴の狀に復歸し、無事に其生を送らんことを求めたので、是れが卽ち彼等の大快とした所である、而して又己を利する最も大なるものと考へられたのである、何故かといふに、此時に當つては爭奪干戈の患はなく、人々は皆性情を恣にすることが出來るからである。彼等は既に現世の救濟を以て目的としたのであるから、其權謀術數を說くのも無理ならぬことである。彼等は生を養ひ自然に從ふといつた所以も、亦唯嬰兒の狀態に於け

る至樂を想像して居つたからである。而して其曠達大悟の言は偶々此境遇を描き出したのである。が、彼等の永く此地位に安んずることの出來なかつた所以は、元來其學術の目的とする所が世態の救濟といふことになつたのであるから、大勢の日に非にして、彼等の道とする所と益悖離するを見ては、何うしても憤懣措くことか出來なかつたのであらう。斯やうに考へて見れば、老莊學に於ける撞着の點の存在するのは、寧ろ當然のことであつて、少しも怪しむに足らないことゝなるのである。而して彼等の學の至極する所も、亦容易に之れを知ることが出來る。程子が老子書、其言自不相入處如氷炭、其初意欲談道之極立妙處、後來却入做權詐者上去(二程全書卷十八、五十六丁)といつたのは固より一面から見れば眞理であるが、程子は唯其表面のみと看て、未た能く其眞相を穿ち得なかつたのである。余を以て之を觀るに古來の學者の中には、往々にして其撞着の點を發見したものはあつたけれども、其の眞相に至つては未た一人の能く之を發揮したものはないやうである、固より余輩の寡聞のため、之を知ることを得なかつたのかも知れぬ。是れに依つて之れを觀れば老莊の學も亦唯實際的の目的を以て起り來つたので、理論を理論として研究し

たものとは考へられない、從つて其思想も尙ほ未だ醇熟の境に入ることが出來なかつた。で、遺憾ながら支那固有の思想は時には固より幽玄の微首に達し天地の秘密に觸れては居るが、意に哲學の極致には達し得なかつたものといはなければならぬ、

宗教と哲學畢

明治卅九年九月二日印刷
同　卅九年九月七日發行

著作者　松本文三郎
發行者　高島大圓
發行者　山中孝之助
印刷者　河本龜之助
印刷所　株式會社國光社
發行發賣所　鷄聲堂
同　井洌堂　山中孝之助
關西賣捌所　合資會社積文社

東京市小石川區原町六番地
東京市小石川區原町六番地
東京市京橋區築地二丁目卅番地
東京市京橋區築地二丁目二十番地
東京市京橋區築地二丁目廿二番地
東京市小石川區原町六番地
東京市京橋區築地二丁目卅番地
大阪市東區南本町四丁目

（定價金四十五錢）

不許複製

丙午出版社藏版

加藤咄堂先生著

通俗講話 佛教要義

全一冊●總クロース美本●紙數凡五百ページ
正價金一圓卅五錢　郵稅金拾錢

本書は著者が多年に研究を傾け盡くして、浩瀚なる佛教の要を摘み萃を抜きて、高遠なる教理を示すに平易明快の筆を以てし、何人にも知り易く解し易き秩序整然たる

一大組織 談話體に説述し先づ佛教以前の印度哲學より大小乘の區別並に其發達變遷を說き、教理を示しては

釋迦牟尼の傳記 に筆を起し、宇宙は如何にして成立せしや、又宇宙は如何なるものなるや、一切現象は如何、其本體は如何と窮盡し、人生問題に於ては

生死の根原 生前死後の狀態、靈魂の有無、輪廻轉生等を明し、其の道德を說いては

佛教の宇宙觀 論じ十善十惡、苦樂因果の原理を示し更に性の善惡並びに

善惡の標準 を詳くして、世出世の道德、戒律を精叙して地獄極樂の說に及び

煩惱の源底 に入り、微密に其分類を說きて唯心所現の順序を示し、深く三界唯一心の妙理に入り微を闡き靈妙なる究め玄を闡き靈

身心の關係 妙なる宇宙と靈妙なる

識心の狀態 との感應を述べて筆舌の及ばざる佛教の幽遠高妙なる境を窺はしめ、苦を離れて樂を得、迷を轉じて悟を開く佛教の要義は

網羅して洩すことなく 更らに佛教發達の歷史を說くに至りては

各宗派の特色 を示し教理を擧げ、終りに其一貫の理を論じたる空前の好著なり請ふ一本を購ふて佛教の妙趣を味はれむことを

文學博士 井上圓了序
加藤咄堂 島地默雷跋

女性觀

全一冊
定價金卅五錢
郵稅金六錢

美神の權化として崇拜すべきか惡魔の化身として厭忌すべきか本書は流麗の文と獨得の觀察とを以て女性觀の變遷歷史上の活動を叙し賣買掠奪等の奇習異俗より名媛才女が佳話並に闇黑面の女性に及び婚姻獨居職業等の問題を究めて社會上の地位を明にし更に戀愛嫉妬等の心理的現象を示し筆を女性の教育婦德の養成に擱く神か魔か請ふ一讀を吝む勿れ

前東京師範學校教授　小山左文二著

日本文法の解說及び練習

全一冊　三百八十ページ餘　定價六十錢　郵稅金十錢

大學豫科、男女兩高等師範學校、各種高等專門學校入學受驗者、並に文部省教員檢定受驗者等考書として、中學校、師範學校、高等女學校の學生及び小學校教員檢定受驗者の參考書として、著者苦心の作に係る。解說周到にして明快、敢するところの練習問題實に一千五百餘。添ふるに明治三十年以降本年まで八年間に於ける各種高等學校入學試驗文法及び明治十八年以降本年まで二十年間に於ける文部省教員檢定試驗文法問題の全部を以つて、一々適切にこれを解說指導せり

久米邦武先生著

上宮太子實錄

全一冊洋裝美本
定價金七十五錢
郵稅金八錢

本書は高眼達識を以て史界獨步の稱ある前大學教授久米邦武先生が該博なる考證と奇拔なる見解とを以て、日本文明の開拓者たる聖德太子の實傳を詳叙し、荒唐不稽なる從來の傳說を擊破し前人未發の新見地を以て其眞面目を發揮し、太子を中心として政治、宗教、文學、美術の各方面に亘りて日本文明の淵源を尋ね、其特色を說きて剩す所なく、論は東西に及び、議は古今を悉くす、眞にこれ多く得べからざるの珍書たり。今や興國の氣運熟して人は皆な我が文明の眞相を知らむことを思ふ。本書の出る豈に偶然ならむや。

文學博士 村上專精序
加藤咄堂 大內青巒跋
著

增補 死生觀

全一冊
定價金四十錢
郵稅金八錢

死生は人生の一大事實にして千古未解の問題たり本書は古來哲人の精到なる思索と英雄豪傑が決死の覺悟とに照し學說と事實との兩方面よりこの問題を解決したるものにして議論穩健文章明晰大に江湖の喝采を博し茲に第十五版を發行するに當り更に死生雜話數十題を加へ其遺を補ひ本問題を論じ明せんとす乞一本を購ふて此千古未解の問題を決せよ。

文學博士 前田慧雲序
加藤咄堂 文學博士 南條文雄跋
著

運命觀

全一冊
定價金卅五錢
郵稅金六錢

人は運命の兒なり榮枯盛衰皆其爲めに左右せらる抑運命とは何ぞや本書は著者が嶄新なる論を以て舊運命觀を擊破し世界各民族の運命に關する風習を擧げ更に深遠なる哲學科學の眞理により新運命觀を建設して個人國家社會の運命を論じ終りに人生の眞趣を解してこれが開拓策を說き此運命と奮鬪して成功の位地に達せるの實例を示す說め浮世の波に漂へるの士來れ開運の鍵を得んとするの徒本書は成功の秘訣なり開運の守符なり。

アーサー、ロイド先生序
忽滑谷快天先生著

怪傑マホメット

全一冊挿畫　定價金五十錢　郵税金八錢

序論にはアラビヤの奇風異俗抱腹絶倒すべき者詩趣津々たる者枚舉に遑あらず本論には宗教家としてのマホメット迫害凌辱の中に隱忍默耐する預言者的高風を叙し更に將軍として渠が千里の馬に跨り屍山血海を蹈破する雄姿を描き進んで渠が政治家としての怪腕鬼術を述べ最後に渠が個人として起居動靜の瑣事より閨門の秘事に至るまで悉く詳記して裸々赤條々たる眞面目を現はす我國空前の大著なり。

醇庵　鈴木券太郎先生著

犯罪論及女性犯人

●菊判全一冊總クロス美本●紙數五百五十ページ●定價金一圓五十錢郵税金拾五錢

犯罪とは何物か犯人とは何者か女性とは何物か女性犯人とは何物か本書は此等問題に答へんが爲めに犯罪生理學、犯罪心理學、犯罪社會學の見地に據り罪罰の根本哲學を開立し世の法曹家の犯罪及犯人定議に一大動搖を與へ女性犯人に就ては其解剖的及生理的特狀を詳說し其人相、毛髮、乳房、生殖器、音聲、筆跡、感覺、色慾、文身の如き亦之を遺傳の法に商量し或は模型の理に依證し先天犯者情熱犯者其他の分類下に於ては各其特質を列擧し我國最近の犯罪事件を具體的に參考し以て理實配合の巧を空め造化の微を闡き人情の細に入り女性の秘器を暴露し其罪惡を檢案する處觀察犀利思想超凡洵に是れ科學の精華文學の上乘たり而して考證は則廣く百家に出入し論斷は則浮薄を避け一言一句悉く根底あり、犯罪學の一大體統、新刑法學派の一大柱礎、理想深遠風神崇高の一大文章此書を指して現世紀の一大產物、思想界の一大革命と云はずんば將た何物をか指さん實に破天荒の奇書也

新佛教徒同志會編纂

來世之有無

全一冊　定價金二十錢　郵税金四錢

現代の名士一百餘家が來世の有無につきて回答せられたるものにして實に之れ空前の珍品たり

「加藤弘之、佐治實然、志賀重昂、井上哲二郎、木下尚江、幸田露伴、前田慧雲、渡邊國武、建部遯吾、井上圓了、島田三郎、南條文雄、村上專精、谷本富、三島中洲、三輪田眞佐子、湯本武比古、戸水寛人、海老名彈正、平井金三、中島力造の諸君外九十餘大家」

曹洞宗管長　森田悟由禪師序
加藤咄堂　峰玄光共著

禪觀錄

全一冊　定價金三十錢　郵税金四錢

禪とは何ぞや曰く言ひ難しと雖ども本書は言ひ難きの禪を說き盡して餘蘊なく更に發して武士道の根底となり凝つて文學技藝の精華となれる事蹟を描寫し逸話あり漫筆あり神韻縹緲一讀卷を擱く能はざらしむ。

文學博士前田慧雲先生著

修養と研究

全一冊　定價金四拾錢　郵税金六錢

博覽高識教鞭を帝國大學に執りて幽を闡き微を穿ち温厚篤實感化を東都の青年に垂れて一世の模範となれるは前田先生なり本書は先生が多年の研鑽になれる佛教教理上の大論文と修養に關する深厚なる談話とを集輯したるものなれば一度本書を繙かんか親しく先生に接して指導を受くるの感あるべし。

ベークマン氏原著
杉村縱横氏譯補

改訂増補

强肺術

全一冊
定價金四十錢
郵税金四錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、歐米に於ける最新式の體力養成法を讀め、此書に六の特色あり

第一、時間を要せざること。
第二、費用を要せざること。
第三、場所を要せざること。
第四、勞力を要せざること。
第五、言文一致なること。
第六、總より假名付なること。

故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し、容易に實行し、而して確實に其功果を收め得べし。

夕星會編、閨秀歌集

白すみれ

三六判頗美本
定價金卅五錢
郵税金四錢

現代の歌壇に於ける女流作家の位置は、決して幾微なるものにあらず、本書は其中に就きて、想の最も高く、調の最も優れたる人二百餘名を拔き、其會心の作一人一首より多きは一人三十首を採錄したるものにして、悉く金聲玉振、妍を鬪はし、芳を競ひ、宛として百華の園に遊ぶが如し。

新公論社編　○附錄學生消夏法

男女學生氣質

全一冊
定價金廿錢
都税金二錢

該書は坪內雄藏、柳橋綱子、幸田露伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山脇ふさ子、奥村五百子、鳩山春子、本田庸一、南條文雄　小杉天外、山縣悌三郎、前田慧雲、井上圓了、島田三郎、松村介石、磯部彌一郎、戸川殘花、鈴木券太郎、石黑忠悳、巡塚麗水、中川謙次郎、南岩倉具威、柳橋一郎、寺田勇吉、ノオスター、坂本盛德、加納久宣、古川流泉、田中治六、加藤咄堂、境野黃津、中島德藏、下田次郎等の大家が、現代男女學生の長短兩方面を觀察し、その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり、

理學士　石川成章先生著

宇宙の默示

全一冊
定價七拾錢
郵税八錢

石川先生は我が國有數の科學者たると共に又熱烈なる宗教信者たり、宗教眼を以て自然を觀察し、科學眼を以て宗教を評論す、天に閃く星辰も、地を彩る山川も、皆な之れ自然の妙音たり、宇宙の默示たるなからひや、先生流麗の筆を以て之れを寫し、時に人生の情熱を論じ、自然の光線を說明し、時に水火の作用を說ひて、人心の煩悶を寫し、時に自然美を示し、時に地球の生命を論ずる所何人か美妙に渴仰し、其秘密に隨喜せざらむ、苟くも宇宙人生に疑を抱くの徒、希くは本書の妙音によつて大悟する所あれ。

加藤咄堂先生著

應用修辭學

全一冊近刊

文名嘖々江湖に知られたる加藤咄堂先生は又我が國屈指の雄辨家なり、本書は先生が多年の經驗と修辭の原則により、演說幷に作文に關する原理を說述して其應用を示し、言語の組立、音聲の抑揚、文章の組織、推敲の工夫に至るまで叮嚀反覆に之れを說明し、古今東西の文話幷に演說家の經驗談を加へ、實益に兼ぬるに趣味を以てしたる近來稀に見るの好修辭學たり。

黒岩周六先生講演

人生問題

全定價金一冊
郵税金五十五錢
八錢

人生とは何ぞや　是れ千古の疑問なり、哲人之を説き、碩學之を論じて、而して懐疑の雲益密に、苦悶の人愈々多からひとす、然るに現代思想界の泰斗、黒岩先生、自ら人生問題に逢着して、疑問の源泉を探し、大に其の眞趣を得て、茲に此書あり、叙する所、神の有無に於ぎり、人生の悲觀樂觀に終る、眞に天籟の妙音なり、世の悶ある人、疑ある人、速に來つて此福音に接せよ、庶幾くは、平穏と滿足と活力とを得て、温く且つ光ある人生に觸着することを得ん。

文學博士　前田慧雲先生著

蓮如上人

全定價金一冊
郵税金三十八錢
六錢

佛教界に、最も多くの特色異彩を放ちつゝある、純他力教眞宗の大成者たる蓮如上人に就て、前田博士が、該博の學識と、燃犀の史眼とを以て、上人の時代、性格、教義、信仰、事業、感化等のあらゆる方面に渉り、微に入り、細を穿ちて、評傳せられたるものにして、上人の眞面目は、歴々として讀者の眼前に活躍し、純他力教の眞髓は、一讀の上に了解せらるべし。

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天先生著

禪學講話

全定價金一冊
郵税金四十錢
六錢

適切簡明、以て精神の修養に資する者は禪也。古往今來、偉人哲士の眞骨頭を鍛錬したるものは禪也。痛言快語、以て人生の眞意義を示し、處世の妙諦を説く者は禪也。本書『人生の謎』以下各章、明快の説有趣の筆、禪の眞髓を發揮して餘蘊なし。

文學博士　三宅雄次郎先生著

小泡十種

近刊

文學博士　松本文三郎先生著

宗教と哲學

全定價金一冊
郵税金四十五錢
八錢

本書は宗教と哲學の專攻に有名なる文學博士松本文三郎先生の研究に成れる論文にして先づ宗教と哲學の干係より宗教と道德、研究と信仰等の十餘章に分ち、精に入り細を穿ち一讀其の干係を領解し而て健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在る事を知らしむ苟も健全なる信仰を樹立し更に其に依て人生の何たるかを解せんと欲するものは請ふ速かに本書を讀め

文學博士　根本通明先生著

易學新説

近刊

文學博士　南條文雄先生著

修養錄

全一冊
定價金四十錢
郵稅金八錢

温厚篤實、而も道心堅固の聞えある博士の實驗的修養を詳細に記載したる者は本書なり。章を分つこと六、節を分つこと二十、著者得意の趣味ある談柄は細大漏さず擧げて本書の中にあり。人生問題の解決に惱める者、若くは樂しき生活を送らんと欲する者は速に來て本書を讀み給へ。本書は蓋し煩悶者の慰藉劑なり、求道者の好資料なり。

獨乙哲學博士　ケーラス先生著
在米國　バウル、鈴木大拙先生譯

阿彌陀佛

近刊

文學博士　村上專精先生著

宗教と倫理

（書名未定）
近刊

島田三郎先生著

我觀人生

近刊

田岡嶺雲氏序
沼波瓊音氏編
小杉未醒氏畫

新古俳諧奇調集

定價廿五錢
郵稅貳錢

蹴林の昔より、新派の今に渡り、調奇にして、妙味言ひ難き俳句、悉く本書に染めらる。これを繙けば、奇趣橫生、耶馬溪を行くが如く、妙義山を攀づるが如し。格に入り格を出でゝ、縱橫自在の俳才を掬ばむと欲するの士は、この奇書を得よ。

井上圓了博士著
寫眞版十數種入

西航日錄

定價參拾錢
郵稅四錢

是れ井上博士の洋行土產なり。歐米に於ける、教育宗敎文學政治經濟等の現況は、博士が周到なる觀察と、輕妙なる文辭とによりて、此に躍動す、征露の戰爭に於て、武名を世界に輝したる日本の國民は、また世界の大勢に通ぜざるべからず、請ふ一本を購へ。

高島米峰氏著
第四版出來

一休和尙傳

定價四拾五錢
郵稅八錢

元日に靈龕を振廻して人の度肝を拔き、末期に臨を晦つて梵天に捧げた彼一休、後小松帝の皇子として、九重雲深きところに榮華の夢を見むともせず、一笠一蓑、たゞ平民的敎化のために一生を送りし彼一休、痴か狂かはた一大偉人か、彼が眞面目、そは本書の上に躍動せり。

島田三郎氏序
高島米峰氏著
文祿堂藏版

理想的商業

定價卅錢
郵稅四錢

商業とは、學竟物を買ひたいといふ人に、賣つて遺はすといふほどの事なり。買ひたいとも何とも言はざるものに、賣らうとするが如きは、是れ豈無理の甚しきものならずや。今の商人、平氣でこの無理を行ふ、ここに於てか百弊起る、夫のお客樣と云ふものゝ、無暗にのさばり返るも是がためにして、商人の矢鱈に侮蔑せらるゝも亦實に是がためなり。賣るに法あり、買ふに道あり、この法を說き、この道を敎へ、以てお客樣といふものゝ立場を明にし、以て商人といふものゝ位置を高め、而して買ふものにはうんと買へと勸め、賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは、即ちこの書なり。但し、讀みたいといふ人に讀んで貰はうがために書いたものにして、もとより讀まうと思はないものにまで、强いて讀ませやうといふやうな、そんな不所存は毛頭これなきものなり。

文學士　丸井圭次郎氏高島米峰氏共著

東洋史

定價拾參錢
郵稅貳錢

學生參考

著者曰く、「形に於ては、恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべからむも、學生を貴くる點に於ては、或は最も大なるものあるべきを信じて疑はざるなり。」と。

新佛教

郵税共一部金拾壹錢
半年分前金六拾五錢
一年分前金一圓廿五錢
切手代用の節一割增

明治三十三年創刊
◎毎月一回一日發行

時代の精神に伴ふ眞の宗教は新佛教なり、有識者の要求する眞の宗教は新佛教なり、青年の慰藉者たる眞の宗教は新佛教なり、人に活力を與ふる眞の宗教は新佛教なり、而してこの月刊雜誌「新佛教」は、即新佛教の宣布を司る者にして、自由討究、傳說排斥の大義に基き、新信仰を鼓吹し、新道德を扶植せむとする者なり。本誌編輯員左の如し

加藤咄堂。田中我觀。高島米峰。古川流泉。境野黃洋。杉村縱橫

發行所 東京駒込區片町十六 新佛教徒同志會
發賣所 東京小石川原町六 鷄聲堂書店

發行發賣所

東京市小石川區原町六番地 丙午出版社
東京市小石川區原町六番地 鷄聲堂
東京市京橋區築地二丁目廿番地 上宮教會出版部
東京市京橋區築地二丁目廿番地 非洲堂
山中孝之助

29

40
730

40
730

013639-000-2

40-730

宗教と哲学

松本文三郎／著

M39
ABA-0108

32.11.14